山と森と藝大と

藝える 15

東京藝術大学

東京藝術大学広報誌『藝える』第15号

発行日
2024年9月30日

編集・発行
東京藝術大学『藝える』編集部

編集長
藤崎圭一郎

アートディレクション
有山達也

デザイン
大野真琴（アリヤマデザインストア）

写真
長野陽一（表紙、P1-4、6-15上）
松下穂香（P16-25、28-29）
冨田里美（P27）

校閲
西村 knack 雅彦

編集
小林沙友里

事務局
東京藝術大学企画総務課

印刷
シナノパブリッシングプレス

藝える

うえる

「藝える」は「　　」と読みます。藝と芸（芸）はもともと別の字で、藝には植えるという意味があり、芸にはくさぎる＝刈るという意味があります。本学になぞらえると、アートの苗木を一本一本ていねいに植えて、一本一本を個性のある創造の木々に育てる場だとすれば「藝」、雑草を刈り樹木を剪定し日々手入れをして美観を保つ庭園のように、自分の技量に磨きをかけ、伝統を未来につなぐ場とするなら「芸」。藝も芸もどちらも大切だから、本学の表記はどちらを使っていても間違いではないのだと思います。さて、本号は長野県にある藝大の山小屋と上野校地の藝大の保存林とヘッジの特集です。自然と向かい合う話のなかで、「藝」と「芸」の両面が語られていきます。ご一読ください。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01 山小屋と森のものがたり

02 未来につなごう! 私たちの山小屋

16 ともに藝えよう、保存林とヘッジ

14 あの画家もプリマ・ドンナも「私の愛する黒沢ヒュッテ」

18 見上げて、巡って、上野の緑を再発見「森と生垣が教えてくれる」

30 油画スペシャル! 授業SANKAN 「描く」にまつわるエトセトラ 美術学部絵画科油画専攻

25 「藝大の森」プロジェクトリーダーが語る「緑のある環境は最たるアートだ」

38 お知らせ

特集

山小屋と森のものがたり

未来につなごう！私たちの山小屋

藝大の山小屋があるって、知ってましたか？
長野県大町市、鹿島槍スキー場ゲレンデにつながる尾根の上に立つ
東京藝術大学山岳部黒沢ヒュッテは、
64年前、当時の山岳部学生たちの情熱的奔走によって建てられ
山岳部が代々運営。現在、国の登録有形文化財となっています。
標高1200mの林の中、学生たち、卒業生たちが集う
山小屋の初夏と冬は、あふれる〝ヒュッテ愛〟に満ちていました。

もともとはリフトが通っていた山の斜面、その中腹に位置する黒沢ヒュッテ。短距離とはいえ結構な急斜面なので、麓への下り移動といえば、冬場はやはりこれが正解。

ひぃ、ふぅ、ひぃ、ふぅ。夏草の青い匂いを吸い込みながら、斜面を踏みしめる。事前の打ち合わせで「最後、ちょっと登ります」とは聞いていました。なかなかの「ちょっと」、でも、登らなければ始まらない。なんたって、今回は山小屋探訪ですから。藝大山岳部が昭和の時代から運営しているという山小屋、黒沢ヒュッテ。立夏を過ぎ、梅雨に入る前の爽やかな季節に行われる「春小屋整備」に、これから1泊2日でお邪魔します。

初夏なのに春？　まあ細かいことは気にしなさんな……と言っているうちに、林の中に、小ぢんまりと佇むメルヘン、いや、メルヒェンをまとった建物が。築64年の国登録有形文化財と聞いて想像していたいかめしさとはずいぶん違い、第一印象は「かわいい」とすら呼びたい、そんな風情である。

はじめて来たのに、なぜかなごめる

正面入り口から左手の庭へ向かうと、すでに到着している山岳部の学生たちが毛布を干したり、掃除をしたり。建物付近にいる一団は、手に手にノコギリや工具を持ち……あら

バルコニーを処置。2021年の大雪で一部が崩壊し、もはや造り替え待ったなし。

ら、バルコニー、壊しちゃうんですか？

「もともと傷んでたのが、数年前の大雪なんかでかなりダメになってしまったんです。踏み抜く危険があるので、床板を外しておこうと思いまして」と言うのは、我々を案内してくださる君塚和香さん(→P18)。建築科OBにして学生時代はスキー部（残念ながらすでに廃部）で活躍、当時からヒュッテを愛し、昨年、ヒュッテの管理・運営を司る「上野山の会」を立ち上げ、理事になった。

うーむ、見ると確かに年季を感じる。何せ64年間、風雪に耐えてきた木造建築。とくに2020年春頃からのコロナ禍では管理がままならず、傷みが加速したとのこと。来る大規模修復への準備と応急処置も、春小屋整備の重要ミッションだという。

山岳部の登録部員数は、現在100名超(!)。コロナ禍の最中に活動できた部活動が少数で、かつ、誰もが閉塞を感じた時期に「山小屋に行けるというのは、まぶしかったんじゃないでしょうか」と君塚さん。今回は学部1、2年生の14名が参加。連携し、手際よく作業を進めている。

「建築科だけでなく日本画、油画、デザイン科、音楽学部の声楽、器楽科も。とくに工具の扱いの心得があるわけではないですが、皆、よくやってくれています」(君塚さん)

バルコニーから建物2階へ入る。おお、素敵！　先端部分から両側へ屋根が傾斜し、ち

ヒュッテ年表

1957　山小屋建設委員会発足。用地探し、寄附金募集を開始
1960　9月に着工、12月末に竣工
1961　2月、突風により屋根が吹き飛ぶ
1998　2度目のバルコニー修繕で全面造り替え
2011　水源地にダムが築造され、水の供給が以前より安定する
2015　寄附によりバイオトイレ導入
2018　国登録有形文化財（建造物）登録
　　屋根の傷みが目立つようになり、修復の検討が始まる
2021　大雪でバルコニーが破損
2023　一般社団法人上野山の会設立
2024　修復のための募金活動を開始

竣工直後の様子。撮影・現像＝渋谷三朗

ヒュッテにはじめて単身で滞在する山本学治。セルフタイマーで撮影。提供＝家族

屋根破損直後。当時の山岳部部長・横沢栄一さん（左）と地元の大工さん、意外に笑顔。

1961年、屋根が復元され完全竣工。周囲にはまだ林がなく、雄大な後立山連邦が一望。

ようど紙飛行機が着地したような形状の建物の屋根裏部分に位置するのが2階の居間。全面ガラス張りの窓から光が差し込む室内は、天井も柱も黒く燻されたような色合いがシック。何というか、人柄のよさそうな居間だ。

　ストーブを挟んで反対側の板の間は就寝スペース。雪山シーズンの来客に備えて泊まり込む小屋番用の小部屋もある。しっかり調理できそうなキッチンは、コンロまわりも食器棚もゴチャッとしているのがいかにも部室的で微笑（ほほえ）ましい。水は近くの沢からパイプで導いてきたもので、夏場の腐敗や冬場の凍結を防ぐため、水は常に流しっぱなしである。

　急階段を下りた1階には、メインの寝室。天井のブカブカした部分は、2階のシンクからの水漏れの名残だとか。裏口の扉脇には物置、トイレ、ん?この細長い箱状のスペースは……おお、近年導入されたバイオトイレですか！「大きなほうを、こちらで微生物が分解してくれます」と君塚さん。恐る恐る開けてみたが、びっくりするほど臭いなし。客にも環境にも優しく、頼もしい装置だ。

　シャワーや風呂の設置計画も以前からあったというが、水源が不安定なため、近くの大町温泉郷やスキー場の施設を利用して過ごすのが正しいヒュッテ・ライフである。

資金難にも、自然の猛威にも負けず

山小屋を建てる計画が持ち上がったのは、1957（昭和32）年。高度経済成長期を迎え、余暇を楽しむ余裕も出てきた当時は、日本中に登山ブームが興った時代でもあった。当時の山岳部員たちから藝大にも山小屋を！という機運が高まり、山小屋建設委員会が発足。ほどなく現在の場所が候補に浮上した。

麓の集落の理解、協力により無事土地を譲り受けることになったのは2年後。建築に際しては、学生案をもとに山岳部顧問であった建築学者の山本学治助教授（当時）が設計を担当したと長く語り継がれてきたが、最新の聞き取りによると、山本助教授と山仲間であった建築科助手、同OB2名が招集されて案が検討され、建設委員会の協議により、建築科OBのひとりで坂倉準三建築研究所に勤務していた現・同科名誉教授の藤木忠善氏の設計案が採用され、その後、山本により監修、現場監理が行われたとのことである。

当初の予算は150万円。資金集めには学生たちだけでなく美術、音楽両学部の教授陣や卒業生も多数参加し、建設委員会が発行した資金募集の手紙には美術、音楽学部長のほか、のちに名誉教授を務めた彫刻家の石井鶴三、東京音楽学校OBで国民的作曲家・山田耕筰といったレジェンドも多数名を連ねている。〈この山小屋は、上野の杜でつながる私たちのいこいの場所であり、母校と山とを愛される先輩各位の御協力を切にお願い致す次第であります〉という文面も、すこぶる熱い。

60（昭和35）年夏に着工したヒュッテは、同年暮にバルコニー未完ながらも竣工。しかし翌年、猛烈な春一番に屋根を吹き飛ばされるという自然の洗礼を受ける。当時の写真を見ると、ほぼ全壊では？というほどの豪快な壊れっぷり。しかしその逆境をバネに、屋根をより強固なものに修復。バルコニーも備えて62年、ヒュッテはより完成された山小屋へと生まれ変わり、当時は丸坊主だった建物周辺の土地には木々が植樹された。現在のヒュッテを風雨から守ってくれる林は、先達たちからの時を越えた贈り物なのである。

以来、山岳部だけでなくスキー部や人形劇団の合宿、デザイン科の山ゼミなど数多くの学生や教職員がここで青春を過ごしてきた。

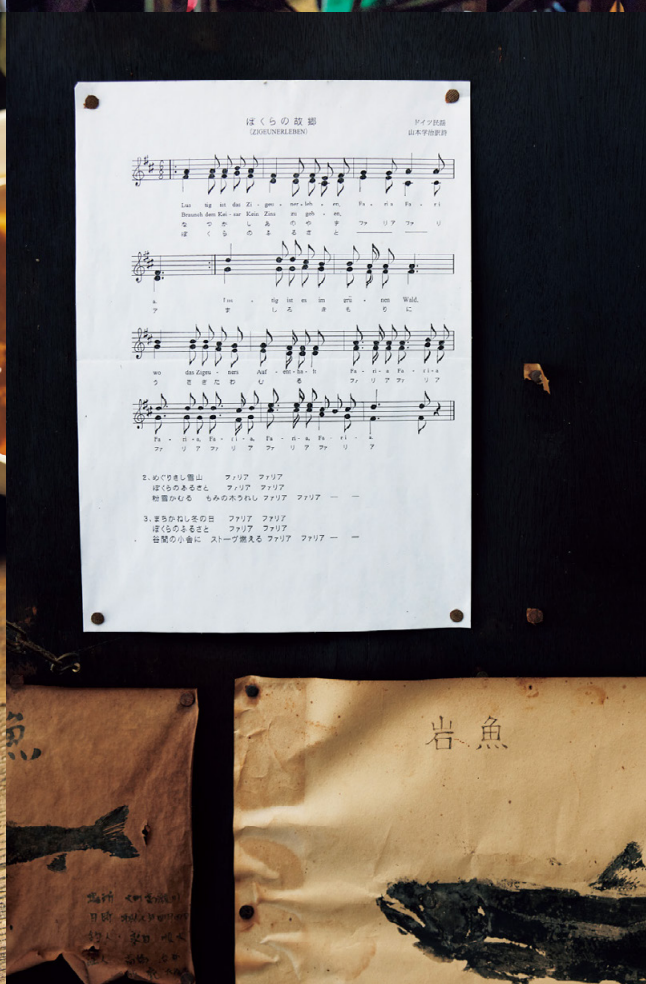
山小屋と山人に歴史あり……とうっとりしている間にも、学生たちの作業は着実に進む。ツナギ姿でバルコニーの解体作業にあたるのは、現在の山岳部部長で建築科2年の「岩ちゃん」こと岩月あおいさん。この春、同じ建

沢から苦心してパイプを引いた話、水道管の破裂を必死で修復した話など水にまつわる逸話は尽きず。現在も格闘中。

上：冠雪した後立山連峰。冬の晴れた日は、２階の居間からも雄大な眺めが堪能できる。下：夕方過ぎから始まるヒュッテの宴。初対面同士もいつの間にか打ち解けた。

居間の天井が黒いのは、ストーブで焦がしたのを隠すため塗装されたという説あり。また、先輩による天井の魚拓の中には、魚拓に似せた絵（！）も含まれているとか。

冬のヒュッテにて。昼間はスキー、夕食後には音楽学部生による演奏が始まる日も。ドイツ民謡「ぼくらの故郷」は山本学治が訳詞を手がけた黒沢ヒュッテの愛唱歌。



築科の先輩だった先代から引き継いだ。

「後輩だから頼みやすかったんじゃないかと（笑）。ヒュッテって、この柱が不思議なんですよね。支え方が独特すぎて……」

突き出た屋根を支える柱は、例の屋根吹き飛び事件の後の修復時、屋根をつなぎ止める補強の意味で加えられたもの。しかし、小屋の外側にシンメトリーに設置されたその柱は今やしっくりと建物になじみ、岩月さん曰く「一生懸命で、いじらしい感じ」がチャームポイントにもなっている。

集う人それぞれが、思いと責任を胸に

岩月さんとともに作業する、やはり建築科2年の加藤日五矢（ひこや）さんが感じるヒュッテの魅力は「予想だにしない発展の仕方をしているところ」。「補修も使い方も、代々の学生たちが自由に考えたことで、予想もしなかった、さらに面白いものになっているんじゃないかなと思います。バイオトイレだって、昔の人たちが見たら、絶対びっくりすると思う」

部長を補佐しながら全体のまとめ役を担っているのは、大関一成（かずなり）さん。音楽研究科博士課程1年のトロンボーン奏者で、先出の君塚さんとともに上野山の会の理事も務める。入部したのは学部3年、コロナ禍の最中だった。

「それまで毎週あった練習や演奏会が全部なくなって、留学もできなくなった。行き詰まりを感じていたとき、そういえば山にもちょっと興味があったなぁと思って、その年の冬にはじめてここに来て……。山岳部の活動が単純に面白かったのもあるし、出会った美術学部の人たちがどんなことを考えて一生懸命になっているのかを知り、自分も意外と真っ当だったんだと思えたんです。だったら、これから先のことも真っ当に悩めばいいんだと」

若者たちに触発され、この後編集長Ｆ教授も飛び入り。写真は自粛します。

山の懐が深いように、この小さなヒュッテも多様な学生たちを受け止める包容力を備えた空間。それには、ここが一貫して「山を愛する皆のもの」であったことが大きいのではないだろうか。大学の施設ではなく、登記上は個人所有（初代の山本学治逝去後は遺族が相続し、現在はＯＢ会前会長の油画・佐藤一郎名誉教授名義。今年上野山の会へ譲渡予定）で管理は歴代の山岳部員に一任。小屋整備を重ねて64年、よくぞ続いた自主運営である。

遠き山に陽は落ちて、平地より早く夜がやってきた。学生たちが手際よく炭火をおこし、脚立に板を渡した即席テーブルを囲んでバーベキューの宴が始まった。遅れて到着したＯＢや大町近郊に住む卒業生も参加し、香ばしい匂いと談笑の声が林を満たしていく。

梢に星が輝く頃には、初夏とはいえ足元からじわじわと冷えが忍び寄る。そのタイミン

グを図ってか、テラスからトロンボーンのファンファーレが。演奏する大関さん……あれ？　上半身、裸？　続いて、男子たちがやはり諸肌脱ぎで列になって入場。今日切った林の枝などを積み上げたキャンプファイヤーに、厳かに点火がなされる。

「コンセプトはとくにないです。厳かな感じでやってみようと」と大関さん。男子たちはめいめい体を焚き火にかざし、気持ちいい！と歓声を上げている。くべた木々が花火のように爆ぜ、火の粉が星空に吹き上がる。

薪が燃え尽きたあとは、三三五五、それぞれの場所へ。1階の寝室や庭に張ったテントで早々に眠りにつく人がいれば、ストーブのついたヒュッテの居間に集い、人狼ゲームやおしゃべりに興じる面々もいる。

取材班は、その脇の板の間で休ませてもらった。仲間と箱の中の絵具のように並んで眠る。こんなの、いつ以来だろう？　でも、不思議と心も体もくつろいでいるのがわかる。キッチンから響き続ける清らかな水の音。寝袋越しにほんのりと伝わるストーブの熱。密やかな話し声。誰かが奏でる「蛍の光」。水の音。隣から立ちはじめた静かな寝息。笑い声。蛍の光。水の音。水の音。水の音――。

目を覚ますと、静かな雨の朝だった。林の木々も、燃え残った焚き火も、誰かがまだ眠るテントもしっとりと濡れている。朝食と最後のミーティングを終えたら、春小屋整備は完了。山を降りる準備に取り掛かる。

山岳部部長
建築科2年
岩月あおいさん

山岳部員兼「上野山の会」理事
音楽研究科博士課程1年（トロンボーン）
大関一成さん

芸術を愛し山に心を寄せる人なら「いつからでも大歓迎」と2人。現役生よ、いざ来たれ。

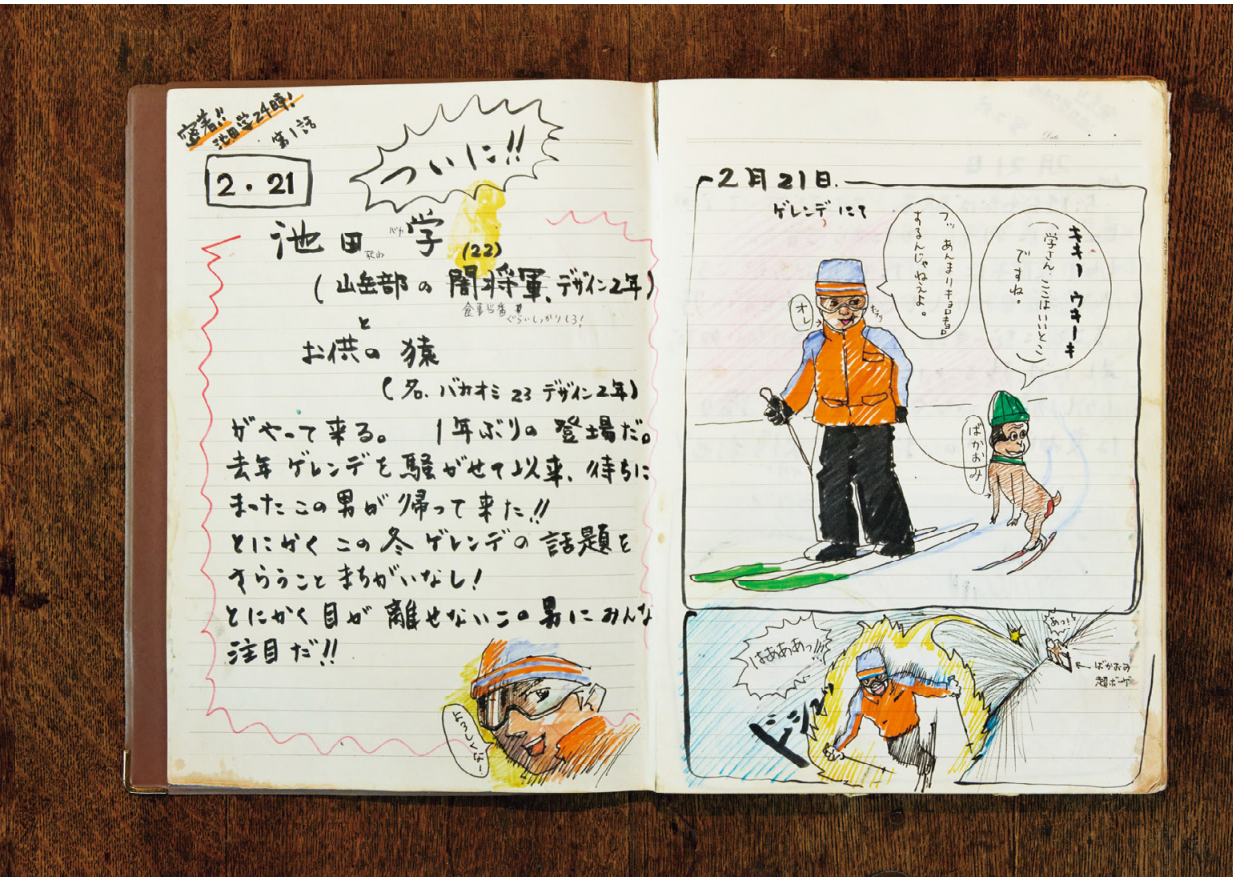
これまで夏の間の小屋活用は十分にはなされていなかったが、昨年、滞在型制作プロジェクト「あーときゃんぷ黒沢」がスタート。今年は『北アルプス国際芸術祭2024』の関連イベントとして進化し、ほかに木彫ワークショップなども行われた。現在は学内関係者に限られた使用を徐々に一般市民へも拡大することも視野に入れ、今年4月から修復に向けた募金活動をスタートさせている。

「文化芸術振興、普及を目指した文化事業の方面にいずれは活動を広げていきたい」と君塚さん。仕組みづくり、資金集めなど課題は（それこそ）山ほどあるにしても、次々世代にも伝えていくのは、自立共生を尊ぶ芸術家の精神。ヒュッテは、その象徴となる場所だ。

そこに山があるから、ではなく、そこに山小屋があるから登る。集合写真（表紙）撮影時、ヨロッとしながらもしっかり学生たちを抱き止めているように見えた黒沢ヒュッテ。「山笑ふ」という季語があるけれど、山小屋も笑うんだ、なんて感じました。自由で愉快、心が解放される芸術家の山のオアシス。次世代への灯、よろしければ、あなたもぜひ。

黒沢ヒュッテ修復のためのご寄附を募集中

詳しくは黒沢ヒュッテを運営する「上野山の会」の公式ウェブサイトをご覧ください。
https://www.uenoyamanokai.com/



あの画家もプリマ・ドンナも

「私の愛する黒沢ヒュッテ」

いつまでもいたい、夢のような場所

池田学さん（画家・デザイン科OB）

まさかこの絵が発掘されるとは思いませんでした。真面目に読まないでください、恥ずかしいから……（笑）。これを描いたのは、2年生になって山岳部に入って、たぶんはじめての冬。闇将軍だの「この男にみんな注目だ!!」だの、スキー初心者のくせに、相当自己顕示欲が強かったんでしょうね。ハードボイルドなキャラクターも、起こる事件も、全部フィクションです。

佐賀の山育ちですが、雪というものにほとんど触れたことがなかったので、スキーも、雪かきのような山小屋の冬の仕事も、とにかく新鮮でした。小屋番は普通1週間から10日くらいですが、僕は1カ月近くも居残ってましたね。ヒュッテにいれば2、3日ごとに新しいお客さんたちがやってくるので、その人たちと一緒にご飯をつくったり、ソリに乗って急斜面を滑ってスキー場の温泉に行ったり、ときには使い残したスキーのリフト券をもらって滑ったり。毎日楽しいし、ヒュッテにいる限りお金もほとんどかからない。僕にとっては夢のような場所で、いつまでもいたい！といつも思ってました。

卒業してからも1泊か2泊でスキーをしに行ったり、夏は近くで釣りをしたり。ヒュッテで好きな場所は、やっぱり2階の居間です。あそこにあるダイニングテーブルは、山岳部のOB

居間の本棚に保存されている、ヒュッテ滞在者たちによる日誌。最古のものは1975年、以降綴られた30冊あまりのノートの中には、著名卒業生の若書きの文章や絵も。

建築科の方が多く、音楽学部は声楽、楽理、器楽、邦楽科が数人。私はぜんぜん上手ではありませんでしたが、とにかく滑るのが大好き。女子が少なかったこともあって、皆さんに本当にかわいがっていただきました。藝大でもっとも楽しかった思い出のひとつとして胸に残っています。

ヒュッテもいいところでしたね。ただ、寒いので、寒がりの私は電気毛布を持って行っていました。山登りもできないのに誰よりも荷物が重く、後輩に迷惑をかけたんじゃないかと……。麓の温泉に入って温まり、寒いなか歩いてヒュッテに戻るんですが、洗い髪が凍ってしまい、お風呂をつくってくれたらなぁ……と思ったりもしました。口には出しませんでしたが(笑)。

歌い手の性で、ちょっと響きのいいところに行くと、声を出してみたくなるんです。ヒュッテの周囲やゲレンデは傾斜があり、建物や木のような障害物がほとんどなく前も後ろも開けているので、ホールで歌うのとはまた違った気持ちのよさがあるんです。

冬のスキーシーズンは学校の試験とも重なっていたので、あるときリフトに乗りながら本気で歌い始めてしまい……気がついたら、飛んできた係員の方に「新雪なんです！　雪崩が起こるからやめてください！」と言われていました(笑)。でも、オペラを歌うときは下半身が支えになるので、学生時代に鍛えておいたことは、けっこう役立っているように思います。

残念ながら、今はスキーはできていませんが、板とウェアはまだ持っています。またヒュッテに行って歌うなら、どんな歌がいいでしょうね。悲しい歌だと寂しくなってしまうので、やはり楽しい歌がいいんじゃないでしょうか。本当に恋しいです。思い出の詰まった場所なので、今の学生の方にもあそこでいい経験をたくさんしてほしいし、そのためにも、ヒュッテをいつまでもかわいがってもらえたらと思ってます。

本気の歌唱であわや雪崩発生？

森麻季さん（オペラ歌手・声楽科OG）

学部1年でスキー部に入部しました。藝大スキー部は関東国公立大学の競技会にも出場する競技スキー部。当時はの方が勤めていた学校の図工室で使われていたものですが、あまりに気に入って、同じものを分けてもらって東京の家で使っていたこともありました。

アメリカの中西部に暮らして、もう10年以上になります。今いるところには、山がないんですよ。湖や森はあるんですが、自然の中に出かけるときも、今はひとりが多いです。ヒュッテにいたときのように、仲間とバカ話がしたいのに……今から思うと、ヒュッテにいたあの頃は僕にとってのザ・青春！

ともに藝(う)えよう、保存林とヘッジ

現在、上野キャンパスの「藝大の森」プロジェクトでは、校地内の「藝大保存林」の再生や、大学周囲の鉄柵を植生豊かな生垣に変える「藝大ヘッジ」の試みが進行中。藝大を取り巻く自然環境は、今、どう変わろうとしているのか？プロジェクトに関わる教授陣が、その現状、未来像を語ります。

右：藝大保存林のメインエリアにある通称「奥の細道」。取材時は初夏で、新緑から成長した葉が最盛期を迎えていた。左：キャンパスを柔らかく緑取る藝大ヘッジ。

見上げて、巡って、上野の緑を再発見

「森と生垣が教えてくれる」

君塚和香

きみづか・わか　東京生まれ。1992年東京藝術大学美術学部建築科卒業。94年同大学院美術研究科修了。98年一級建築士事務所ワカ設計室を設立。設計事務所主宰の傍ら、99年より藝大施設の計画・設計に携わり、現在はキャンパスグランドデザイン推進室特任助教として清水泰博教授とともにプロジェクトを運営。一般社団法人「上野山の会」理事。

宮北千織

みやきた・ちおり　東京生まれ。1992年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業。94年同大学院美術研究科修了、院展初入選。97年同博士課程満期退学。2002年再興第87回院展日本美術院賞ほか受賞多数。近年の個展に『宮北千織日本画展―つむぐ―』（横浜そごうほか）など。文星芸術大学教授を経て、18年日本画専攻准教授、24年より同教授。

この森、手を触れるべからず？

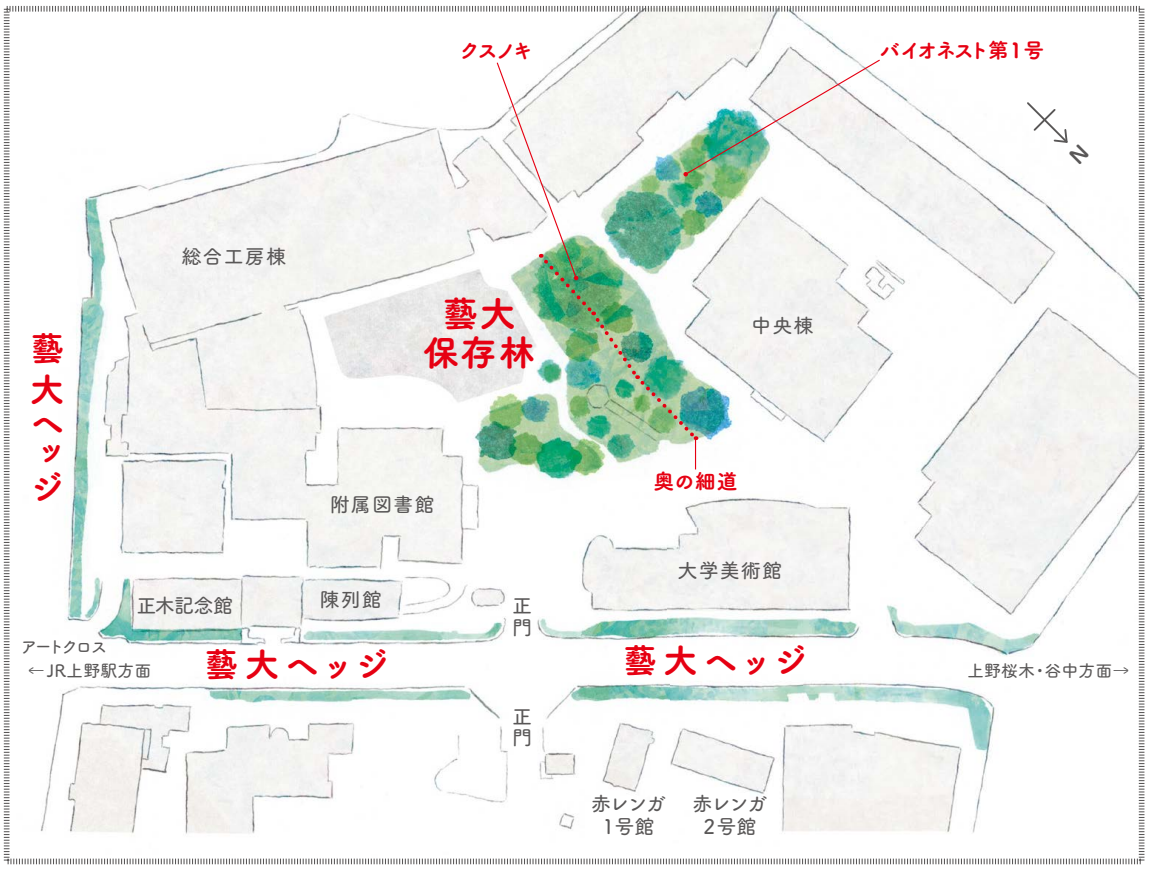
宮北　日本画の学生は、入学するとまず植物を描くことからスタートするんです。実物を見て描くことを大事にしている専攻なので、学生たちからも自分で育てた植物を描きたいという声があって、一時期園芸部が立ち上がり、私が顧問をやらせていただいていたりもしたんですが、コロナ禍もあってなかなか思うように活動ができず……。藝大の森も藝大ヘッジも、私としては興味津々です。

君塚　宮北先生とは藝大で同期、地元も同じなんですよね。今日はよろしくお願いします。では、「奥の細道」から保存林に入りましょう。なぜこういう名前なのかは謎なんですが。

宮北　普段から学内でスケッチのネタを探していたりもするんですが、ここ、なかなか足を踏み入れづらかったんですよね。

君塚　足元、気をつけてください。かなり鬱蒼としているでしょう？　昨日のように風雨が激しいと（落ちた枝を指して）こんな大きな枝が上からドーンと落ちてきて危険なので、むやみに立ち入れないよう、入り口にささや

藝大保存林と藝大ヘッジ in 上野キャンパス



かな結界を置いているんです。

宮北　（周囲を見回して）うわぁ……。

君塚　現在の藝大の敷地はもともと寛永寺の境内の一部で、本院の脇に子院がいくつもあったところ。奥の細道は子院と子院の境界にあたるところだったようです。江戸時代、もしかしたら縄文の頃の面影も宿している場所で、東京美術学校の頃から学生や教授たちはスケッチや考えごとをしていたんだとか。

宮北　確かに、「ここの絵かな？」と思うような作品がありますね。

君塚　用務員さんがあるとき枝先を切ったら、ある先生が「せっかく描いていたのに！」とすごく怒ったなんて話も伝わってて（笑）。そんなこともあってか、何となくアンタッチャブルな場所になっていたみたいです。本当は、枝先をほどほどに切ってやったほうが育ちがよかったりもするんですが、手入れをしなかった結果、植生が乏しくなり、下のほうはアオキとかヤツデとか、暗いところでも大丈夫なものしか育たなくなってしまっていて。

宮北　大雪で大変だった年もありましたよね。

君塚　2014年の冬ですね。上野公園の

左上から時計回りに、ヘビイチゴ、クサイチゴ（花）、シロダモ、シモツケ、ムクロジ（実）、チャノキ。

藝大保存林と藝大ヘッジの主な植物たち

アオキ　アオダモ　アカガシ　アカマツ　アセビ　アブラチャン　アラカシ　イチョウ　イヌガヤ　イヌツゲ
イボタノキ　イロハモミジ　エノキ　カジイチゴ　ガマズミ　カマツカ　カヤ　カラスザンショウ　キヅタ
クサボケ　クスノキ　クチナシ　クロマツ　クロモジ　コゴメウツギ　コムラサキ　サカキ　サワフタギ
サンショウ　シャガ　スギ　スダジイ　センリョウ　タブノキ　ツリバナ　テイカカズラ　テリハノイバラ
ドクダミ　トチノキ　ニシキギ　ニリンソウ　ネズミモチ　ノイバラ　ノムラモミジ　ハウチワカエデ
ハナイカダ　ヒイラギ　ヒサカキ　ヒノキ　ビワ　ホオ　マサキ　マンリョウ　ムラサキシキブ　モチノキ
モミジイチゴ　モミノキ　ヤブツバキ　ヤブデマリ　ヤブニッケイ　ヤマツツジ　ヤマブキ　ユキヤナギ
など（2024年9月現在・五十音順）

木がたくさん倒れたんですが、ここでもかなり枝が折れました。でも、それで空が開けて、逆に光が届くようになって。当時、ちょうど上野キャンパス全体の将来像を描くマスタープランがまとまったところだったので、そのタイミングで関東の在来種で植生を再生する実験を始めることになったんです。侵略的な外来種を一掃し、本来ここにあったものを植樹して育てていこうと（→P25〜）。

宮北　ここは武蔵野台地の突端だったんですもんね。何でもいいわけじゃないっていうところが、すごくいいなと思いました。

植物のなかで思索できる贅沢

君塚　14年から16年にかけて植えたものが今、少しずつ育ってきていて……この赤いのはクサイチゴ。コロナの頃は誰も来なかったので、お手入れのときに集めてジャムにしました。

宮北　（食べる）おいしい。あ、ビワもある。

君塚　植えたときにそれぞれに名札をつけていたんですが、だいぶ取れちゃったなぁ。

宮北　名札がついているとありがたいですよね。植物の名前がわかると、そこから新しい発想が生まれたりもしますし。

君塚　あちら側にはチャノキもたくさん植えました。岡倉天心の『茶の本』にちなんで。

宮北　うわぁいいなぁ……あ、実がなってる。

君塚　花は白。葉は柔らかいときに摘んでレンジで煎茶にして、ここの世話をしてくれている「お世話隊」の学生たちと飲みました。

宮北　（上を見上げて）これは大きな木……。

君塚　ホオの木ですね。かなり古い。葉っぱに味噌を塗って焼けば朴葉味噌ですね！（笑）

宮北　おお……（足元を見て）この実は？

君塚　ムクロジの実。果皮にサポニンが含まれていて、石鹸がわりになります。果皮を剥いた後に残る黒くて硬い種は、羽根つきの羽根の先端になるもの。ムクロジは藝大の土に合うみたいで、そこかしこに生えています。

宮北　染色の材料になるサイカチも食堂の前に植わっていますね。取手キャンパスには実験園があって、紙の材料になるコウゾやミツマタ、染料になるキハダなど、あと工芸科がウルシも植えているんですが、上野でも育てようと思えばもっと育てられるのか……。いつか藝大産の画材なんかができるといいんですが。

君塚　昨年は染織の学生が、ここの植物で色をつくって修了制作に生かしてましたね。アイを育てたり、この間も漆芸専攻と一緒にウルシを植えたり。木を植えるときは同じ仲間をペアで植えるんですが、ここの監修をしてくださった田瀬理夫（みちお）さん（→P26）曰く、植物って仲間を認識するらしいんですよ。根っこで触れ合ったりして対話しているらしくて。

宮北　驚きの世界ですね。あ、これもすてき。

君塚　シロダモ。赤いのが新しい葉っぱです。

宮北　ビロードみたい。これ、挿木できそうですね（枝を拾う）。前にもここで剪定したマサキの枝をいただいて……私、挿木で増やすのが好きで、いろいろ拾っては家で育ててるんですよ。そうだ、ここでいちばん樹齢が長いのは、どの木ですか？

君塚　（少し歩いて）これですね。クスノキ。

宮北　（見上げる）すごい！　幹も太い！

君塚　樹齢は数百年かな。校舎の上から見るとブロッコリーみたいです。普通なら保存樹としてプレートがつけられるところですが、藝大はそういうことをしていない。まあ、そ

ういう校風ってことで。クスノキからは樟脳が採れるので、この枝からも匂いがしますよ（落ちた枝をノコギリで切る）。

宮北　いい香り！　タンスに入れてみよう。

君塚　この「奥の細道」周辺がメインですが、ほかにもいくつかエリアがあって（P19地図参照）……あそこに、ちょっと盛り上がってる箇所、もしかしたら古墳なんじゃないかと。

宮北　へぇーっ。ああ、でも、そんな雰囲気。

君塚　脇の窪んだところに、用務員さんが集めてくれた膨大な落ち葉や刈った枝葉を積んでバイオネストにしています。ミミズや微生物が活躍して腐葉土をつくってくれるんですが、ヘッジに撒くほか、台東区役所からここの腐葉土でホップを育てたいという話がきて、ついに地産地消のビールもできました。

宮北　素晴らしい。学生の方々は、くれぐれも変なものを入れないようにしていただきたいですね（笑）。それにしても、これだけ豊かに植物があったとは……。以前は校内に花壇や植物園があって、温室ではランなどが育てられていたそうなんです。園丁（草木の手入れをする人）さんもいらして。

君塚　今の総合工房棟のあたりですね。「ひょうたん池」もありました。

宮北　日本画の教授陣にも聞いたんですが、40代後半の先生でも学部2年か3年までは植物園でスケッチをしている。そして、皆が口をそろえて「あの空間は本当によかったよね」と言うんです。日本画はもちろん、工芸科も文様や図案のために植物を描いていたでしょうし、そこへ行けばモチーフが見つかって、草木のなかに身を置いてスケッチをしながら、ゆっくり絵や描くことについて考えられる。アトリエとは違う、そんな場所があったのはすごく幸せで贅沢なことだったと思います。

取材時、ちょうど日本画の大学院生が藝大の森でスケッチ中。実をつけたばかりのビワを、繊細に描き込んでいく。

君塚　続いて、藝大ヘッジをご案内します。ヘッジは「藝大の森」プロジェクトの一環で、大学を囲む老朽化した鉄柵を生垣に変えようと16年から毎年、数十mずつ植栽を進めています。40種類ほどの在来種を、常緑樹、落葉樹と交互に、種類も、くじ引きでランダムになるよう細かく調整しながら。

季節の変化に敏感でありたい

宮北　わあ、すごく整ってる！　花も、この季節はたくさん咲いてますね。

大学美術館前のスダジイの巨木。かなりの老木で樹医の治療を受けている。元職員が種子から発芽させて育てた若木を傍に植え付けたが、親木もまだまだ健在。夕陽を浴びて立つ姿はひときわ神々しい。

君塚　シモツケにムラサキシキブ。ヤマブキもきれいなんですが、周りを凌駕してしまうのでその下が育たなくなっちゃうんです。これはテイカカズラ。いい匂いがしますよ。

宮北　本当だ。ドクダミも絵になりますよね。

君塚　チョウや花蜂もよく来るようになりました。モミノキやクロマツも。……あ、これは抜かないと（ツル性の植物を引っこ抜く）。

宮北　外来種ですか？

君塚　ヤブガラシ。日本のものですが、どんどん伸びて他を覆ってしまうんです。おひたしにするとおいしいらしいんですけどね。

宮北　えー！　でも、こうして生垣になると、雰囲気が本当に優しくなりますね。

君塚　そうですね。以前はただの柵で、大学美術館ができたときに歩道を広げて高木と灌木を植えたけれど、25年経つうちに土が流されたり、犬の散歩で踏み固められたりしてみすぼらしくなってしまった。なので、ヘッジをつくるときに土留めをして、新しい土を入れ直して……。緑化補助金も出たので、ベンチもつくりました。ここでお弁当を食べたり、休憩したり。空間の印象が変わったと、多くの人に実感してもらえているみたいです。

バイオネスト。自然は自然にあるものでつくるのが藝大の森の基本方針。

宮北　そうでしょうね。18年に藝大に戻ってきたとき、大学の周りが様変わりしていてすごく驚きました。学校の周りを歩くのが、楽しくなりましたから。

君塚　次でヘッジの植樹が9回目になるんですが、いよいよ上野桜木側に到達します。ここ、音楽と美術の両側の角にレンガの柱が立ってたの、覚えてます？　それもヘッジと一緒に復元するんですが、近所のコンビニに行くために、学生がよく柵を乗り越えるんですよね……。

宮北　わかります。正門まで戻ると、けっこうな距離を歩かなくちゃならないから。

君塚　だから、葉っぱがチクチクする植物をたくさん植えようかなと（笑）。学生有志だけだったお世話隊も、最近は地域の方がボランティアで参加してくださるようになったので、とても助かっています。

宮北　そうですよね。自分でも庭づくりをしているので、皆さんの活動には本当に頭が下がります。上野にこんないい森や生垣があることを、科の皆にも伝えて一緒に散策したいなと思いました。まずは、季節の植物に興味をもって目を向けることから始めたいと。そして、挿木好きとしては、いただいた植物を立派に育てて、いつかお戻しできればという夢も膨らませております（笑）。

君塚　アハハ、ぜひ！　お待ちしています。

「藝大の森」プロジェクトリーダーが語る

「緑のある環境は最たるアートだ」

清水泰博

きよみず・やすひろ　京都市生まれ。1981年早稲田大学理工学部建築学科卒業。83年東京藝術大学大学院美術研究科修了。設計事務所勤務を経て、87年SESTA DESIGNを設立。環境芸術大賞ほか受賞多数。2002年デザイン科助教授、2010年より同教授、理事・副学長（研究担当）。「上野文化の杜新構想実行委員会」会長。

上野に武蔵野の四季を再現する

藝大保存林、藝大ヘッジの整備を進める「藝大の森」プロジェクト。発端は、2013年に発表された「藝大上野キャンパスマスタープラン」だった。その策定に関わったひとりが、デザイン科の清水泰博教授である。

「マスタープランは、もともとは建築科から提起された話。それまで藝大には、キャンパスの空間をどんな方針で整備していくか、長期的なビジョンがありませんでした。ですから、まずは調査から。学内で、どこがどの場所を管理しているかを調べてもらって色分けをしてみたところ、各科の占有のバランスが取れていないことがわかってきたんです」

プロダクトから建築物、都市環境まで幅広くデザインを手掛けてきた清水教授がとくに関心を寄せたのが、キャンパス内の空間整備。とくにメインエリアの奥の細道一帯は、長年誰も手をつけておらず、荒廃が進んでいた。

「ここの木はスケッチの対象だから切ってはダメだと長く言われていましたが、現実にはほとんど活用されていなかった。繁殖力の強

い外来種に侵食され、ほぼ極相林（陰樹で構成され、植生が固定した状態）でした」

加えて当時、清水教授が抱えていたもうひとつの問題意識が、学生たちに四季の感覚が乏しくなっていたこと。

「二十四節気や七十二候をテーマにした課題を学生たちが出してくるけれども、どうもウエブで調べただけで、現実には見たことがないものを扱っているような気がしていて……。それで、四季を感じられる場所をキャンパスのあちこちに、パッチワークのようにつくろうと提案したんです」

清水教授が助力を仰いだのが、アクロス福岡の空中庭園「ステップガーデン」や京成上野駅の改築工事で桜並木を整備するなど、都市に緑を調和させる作品を数々手掛けてきたランドスケープデザイナーの田瀬理夫氏。在来種の森に変えていくという方針は、最初のヒアリングの段階ですぐに決まったという。

「その地の植生はその地の水系で決まる。多摩川と荒川に水が注ぐエリアが武蔵野だという田瀬さんの解釈に、私も深く納得しました。あくまでここの土地と縁のある、武蔵野のものを植えるんだと。すぐに、植える在来種をリストアップしてもらいました。200種近くあったかな」

藝大がやらなくてどうする！

実践のタイミングがほどなく訪れた。マスタープラン策定の翌14年、東京は大雪に見舞われ、上野公園一帯に被害が発生。藝大の樹木も、枝が折れるなどのダメージを受けた。

「これはまずいと田瀬さんに見てもらったところ、逆に彼は『今がチャンスだ』と言ったんです。これだけ上がスカスカになれば、光が入って苗木が育つと。2月で、ちょうどその年の予算が余っている。学部長、施設環境整備委員長に急ぎかけあって、3月中に苗木を大量に買い、総合工房棟のテラスに運び込んだ。植える準備が整うまでもたせようと、ひと月あまり毎日水やりです。そして結局、私の授業時間に学生を動員して植えました」

人を雇って植えてもらうとお金がかかりますからね、と清水先生。悪戯っぽい笑顔の裏には、もうひとつの意図があった。

「植えれば、愛着が湧くでしょ。学生それぞれにイロハモミジ、コナラなどと担当を割り振れば、これは自分が植えたものだとわかるし、育ったら、うれしいじゃないですか」

そうして少しずつ育っていった保存林の植生は、観賞用の庭園のように美観優先ではなく、あくまで「自然の状態に近いもの」。しかし、そこが肝要だと清水教授は言う。

「要するに、この土地に本来あった姿に戻すということです。そもそも日本の自然から日本の文化が生まれているわけで、藝大の美術なんて、まさにそこに根ざしたもの。上野キャンパスにも、かつては植物園があって、育てたウルシから漆を採取して使う、自給自足のようなこともしていたんですから。正直、私もよくわからないまま始めたところはありました。状態があまりにもひどかったからね。でも、こういうことができるのは藝大くらいなんじゃないかとも思ったんです。自然からインスパイアされてアートをやっている藝大が本物を知らなくていいのか、美意識をもって取り組まないでどうするんだ、と」

16年、校舎を囲む鉄柵の老朽化対策としてもちあがった生垣づくり＝藝大ヘッジも、同

ヘッジの植樹ワークショップ。落葉樹と常緑樹が千鳥配置になった配列表に基づいて植えていく。学内関係者だけでなく、子どもから大人まで幅広い年齢層が土に親しむ。

じコンセプトに基づいて着手。その際も大事にしたのは、やはり季節感である。

「最初は街路樹にするような常緑樹のみでやる案も出ましたが、保存林と同じく落葉樹を半分入れて。冬場は一時的に枯れるけれども、春になればこの花が咲く、夏にはこんな花が……というふうに。年中印象が変わる、それがヘッジのテーマでもあります」

大事なのは、一にも二にも〝手入れ〟。

「『お世話隊』の構想は、保存林に着手した頃にできていました。最初はデザイン科の学生が多かった『虫部』に、植物を育てれば虫が寄ってくるよと言って(笑)。それがやがて地域の方々を巻き込む形に発展したんです」

やがてアートの〝庭〟になるまで

保存林にしてもヘッジにしても、当初は学内から反対意見も上がった。しかし、粘り強い交渉と、実際に伸びていく植物たちの姿が説得材料になったと、教授は振り返る。

「実は、どちらも実験だと言って始めているんです。一気に全部やるんじゃなくて、少しずつ。そのうちに『へえー、こんな感じになるのか』と見てわかってもらえれば、継続できる。絶対にいやだと言われたら、いつでもやめられるというのも実験のいいところで」

芸術の学び舎に緑を広げる。その実験は、「庭づくり」のようだったという。

「都市デザインで緑地の提案をするときによくテーマにしたのは、感性に働きかける空間。木漏れ日の下にいたり、水が流れているのを見ていたりすることに惹かれていたのは、要するに、自然を都会に持ち込みたいということなんですよね。だから結局、私がつくってきたものは、みんな〝庭〟だったんじゃないかと。保存林もヘッジも、すごく自然に近い庭」

こまめに手入れする体制づくりが維持の要。「楽しんでもらえているならそれが何より」と清水教授。旧大浦食堂のマスター・北澤悦雄氏の姿も。

それもアートなんでしょうね、と清水教授。

「神がつくったものを研究するのがサイエンスで、人がつくったものはアートだと言った作家がいますけれども、人がつくったものはすべてアート。そうすると都市空間は、アートの最たるものであるはずなんです。でも、絵画や彫刻のように美術館に入るものだけが芸術作品だと思い始めてから、街はつまらないものになってしまった。昔の生活のなかには、アートがもっと普通に存在していたんだと思いますよ」

藝大のなかも周囲の空間自体も、すべてがアートになる。その理想図は、13年の時点ですでに描かれていた。マスタープランのなかの「補92号プロジェクト」と題された計画図。補92号とは、美術学部と音楽学部の間にある道路の当時の都市計画名称で、そこを人中心の道にし、やがて公園のように整備していくことを目指していたのだ。

この理想の実践ともいえる試みが、今年9月の藝祭期間の2日間（6〜7日）に行われた。台東区が藝大前の車の通行を止める社会実験を実施したのである。これによって、一時的ではあるものの、藝大が地域に開かれていく一歩が、確かに踏み出された。

「私は今年度で退任します。その後はNPOをつくって関わろうとも思いましたが、学生が入れ替わるように、課題も次の世代に渡していくべきなんだろうなと……。植樹はアートで、その空間づくりもアート。それをどう伝え、周辺施設と連携していけるかを考え続けています」

「藝大上野キャンパスマスタープラン2013」より、アートクロス側から見た計画図。今年9月の実験時には、ヘッジの緑を愛でながら美術学部〜音楽学部間を自由に行き来できる空間が誕生した。

「藝大の森」の日々の活動の様子はこちらから。お世話隊員、募集中です。
https://www.facebook.com/geidaicampus/

PART 1 共通カリキュラムNo.1「創作研究」

作品が動き、作者が語る 想定外連発の ファースト発表会

あれ？　作品はどこに

イーゼルにキャンバスを立てる。描くモチーフを見つめ、構図を決める。距離や角度を測り（鉛筆を立てるあれ、やってみたい）、いざ――。

人生で一度も油絵を描いたことのない人（筆者）の妄想。それが、頭を駆け巡ります。だってこれから訪問するのは、絵画科油画専攻の授業。昔も今も画学生（死語？）が目指す学び舎の頂点ですもの。近年では、この夏に映画化もされた美大系青春コミック『ブルーピリオド』の舞台として再注目。意外にも、当連載では初訪問です。

時は5月下旬、油画専攻学部1年の共通カリキュラムNo.1「創作研究」の作品講評。4月上旬にガイダンスを受け、約2カ月かけて作品を制作した学生たちにとって、これが入学後初の作品発表の場……ということは、件（くだん）のコミックだと主人公が打ちのめされる場面じゃないですか！　カリキュラム内容を記したペーパーによると、課題は「今。わたしのそばにおきたい風景。―目の前と後ろとその淵を描く―」。謎めいたフレーズの上には、テーマとして「CARAVAN　何もない贅沢」とも。むむむ、謎、さらに深まる。

早速教室にお邪魔すると……あれ？　作品がない。これまで何度か拝見した美術学部各科の講評会だと、すでに室内なり屋外なりに作品が設置されていて、それを教授陣が巡りながら評していく感じだったはず。しかし今回は1年生担当の5人の教授陣が椅子にかけ、その後ろに学生たちが集っているが、肝心の作品が見当たらないのだ。

「じゃ、始めてください」。杉戸洋教授の発声ののち、ゴロゴロゴロ……と畳1畳ぶんくらいの台

こんな感じで次々登場。習作から完成作まで、制作したての個性あふれる作品がプレゼンつきで披露される。

油画スペシャル！

授業SANKAN

「描く」にまつわるエトセトラ

美術学部絵画科油画専攻

開学以来、美術界に数多の才能を送り出してきた油画専攻。歴史と伝統を受け継ぎつつ、そこは常に自分だけの可能性を開花させたいと願う魂が集う場所。学部1、2年生が学ぶ、リアル“青の時代”を見学しました！

挿絵＝小柳景義　文＝大谷道子

「かわいいものしかつくりたくない」と作者。確固たる作家の主張はすでに、作品にも言葉にも表れている。

３分間のプレゼンに凝縮された個性。服装や立ち居振る舞いも表現のひとつ。左の作品は立体作品を撮影し、その映像も披露。

車を引いて最初の学生が登場。作品自体が移動してやってくる、なるほど、これが「キャラバン」か！

作家の数だけ風景と言葉がある

「キャラバンといえば、遊牧民。旅をする人たちってすごくカッコいいと思ったけど、私、ひとりがめちゃくちゃ苦手なので、気に入ったものを集めた、落ち着ける旅のテントをつくりました」

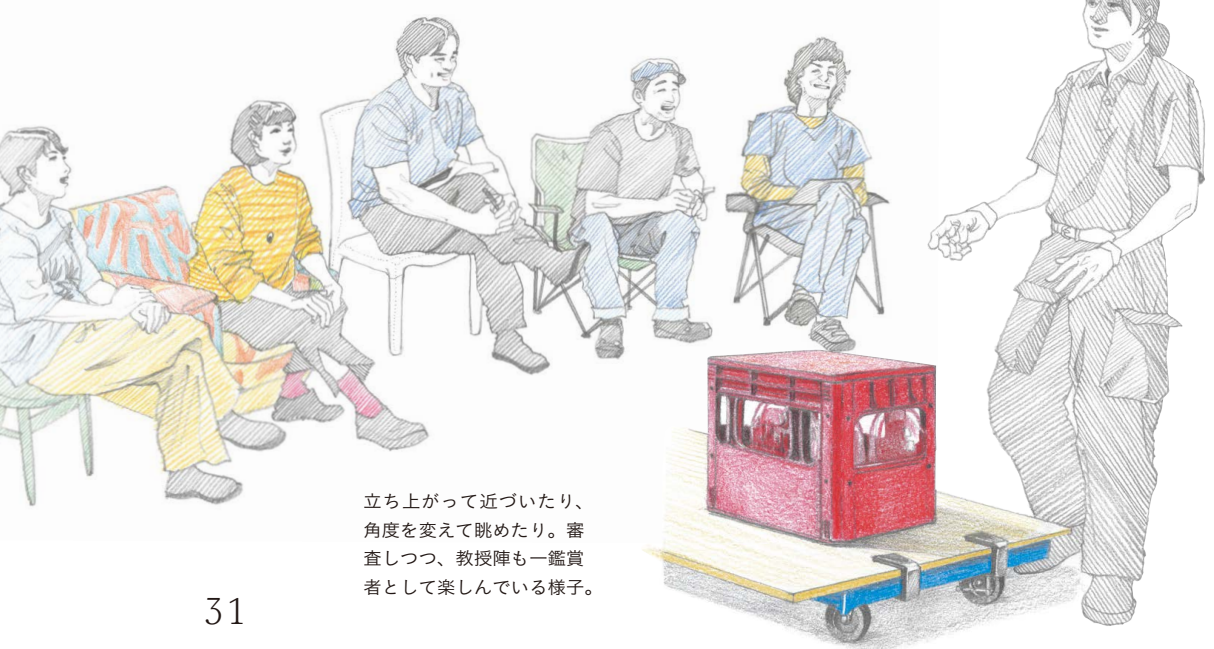
登場したのは、迷彩色のひとり用テント。不思議な刺繍や飾りつけが施され、中には生活用具あれこれと絵画数点、さらに周囲には「結界」だとして小石が点々と。ううむ、素人頭でイメージしていた油画とはかけ離れた、かなり奔放な作品。のっけから頭が真っ白ですが、教授陣は「実際、外に出して寝てみたりしたの？」「刺繍すると雨漏りしちゃうよね」と少しも動じず、作品をつぶさに眺め、コンセプトや制作方法を問うていく。

続いて登場したのは、紙を張ったラック状の物体。学生は「今から悠久の物語の話をしようと思います」とひと言告げ、ボトルの水を飲むと、残りの水をラックの上からドボドボとかけてボトルを床に放り（！）、淡々とプレゼンを続けた。

「長い旅、悠久の時……でも、シャワーの水が床に落ちる一瞬の出来事かもしれない」

インスタレーション？　パフォーマンス？　安直に「画力対決！」的なものを想像していたけれど、なんだか違う。そうなのです。油画専攻といっても、作品は絵画だけでなく立体、写真、コラージュ、さらには映像や音楽など多種多様。ここは広く現代美術を学ぶ場でもあったのです。

自分の居場所を見つめて描かれた自画像、思い出の風景をたどって描かれた幻想的な風景画など



立ち上がって近づいたり、角度を変えて眺めたり。審査しつつ、教授陣も一鑑賞者として楽しんでいる様子。

など、絵画作品はさすがの説得力。キャラバンという課題からか、アトリエの外にモチーフを求めた作品も多く、コカ・コーラの赤いコンテナを台車に載せ現れた学生の作品コンセプトは「流通」。上野界隈のお地蔵さんに供えられていた硬貨を自分のお金（同額）と交換し、それを契機に「統制できない大きな流れ」に思いを馳せる。観客には、一作一作が忘れ難い風景として刻まれる。

そして、個性的な作品同様に魅力的だったのは、若き画家たちが自作を語るボキャブラリーの多彩さと力強さ。「私にとっての風景は、静止画というより動いているもの。もっというと、生きているもの」「（心の中の風景を描くことは）恋に似ている感覚。人に対する恋というよりは、春のはじめ頃、一輪最初に咲いた花を見つけたような気持ち」「（制作したポシェットの中身を問われて）自分が常にもっている不安と、飴が入ってます」などなど、独特の表現に、教授陣も制作者としての実感のこもったリプライを返す。講評というより、これは芸術家同士の率直かつ真摯な対話だ。

「学生が55名いるということは、55カ国語で話してるようなものなので（笑）。受験が終わってやっと自由に自分の絵を描けるという人もいれば、もっと基礎をやりたいという人もいる。今はとにかく、人前で恥ずかしがらずに吐き出すだけで精いっぱいだと思うので、評価はまだ必要ないのかなと思ってます」とは、作品を見終えた杉戸教授の弁。まずは一歩、そして課題に向き合いながら、自分の表現のあり方を探す……それこそが、これからのキャラバン。思えば最初の課題に、これほどふさわしいテーマもなかったのだ。

PART 2 自分が「何か」を見るように「何か」もまた自分を見ている

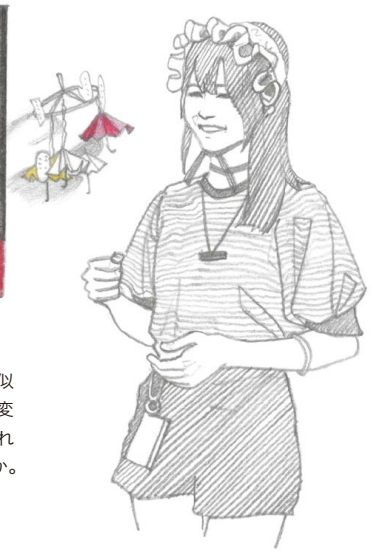
選択カリキュラムNo.1「視点の交換」

別の人の目線で世界を眺めれば

「描くとは？」を探る油画の旅は続く。次なる授業は、齋藤芽生（めお）教授担当。約3週間、「視点の交換」をテーマに自分ではない他者の視点から世界を捉え直すことを軸に作品制作を行う。こちらも、訪問当日は講評会だった。

授業では、まずエクササイズを実施。①動物や無機物などある存在の立場からそれぞれの世界観を述べさせる、②ある人物になり代わって街を歩きそれを記録する、③ある場所が見つめてきた出来事や歴史を想像しドローイングなどで表現する、という3つの課題から1つを選んで行うというもので、それに立脚して、視点の交換とギャップをテーマにした作品を制作する。もののなかに見いだした物語を想像力豊かに具現化する齋藤教授の持ち味が反映された課題ともいえる。

「油画の先生ひとりひとりが自分の専門性を生かしてカリキュラムをつくるので、どうしても作家の考え方は出ちゃいますね。こちらがあまり遠慮しないぶん、学生の側もさまざまな答えが出せるような課題なので自由ではあるんですが」



描いているうちに自分に似てきたという座敷童像。変装用のヘッドドレスも「慣れて普通になってきた」とか。

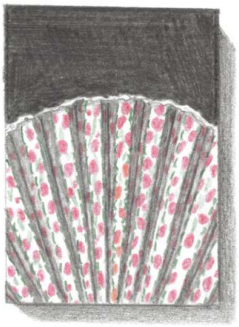
現在はSNSで複数のアカウントを持つように、ひとりの人のなかにいろんな自己が成立しうる時代。視点を切り替え、器用に別人になり代わることも可能な日々を、学生たちは生きている。「そうであっても、他者の気持ちがわからないとか、逆にそれをものすごく汲まなきゃという共感性を強いられて苦しんでいたりもするので……そういう彼らが視点の転換をどう考えるのか、というところにも興味がありましたね」

その習作と成果を拝見しよう。まず、エクササイズでは、壊れて道端に捨てられたビニール傘の気持ちになってみたり、宇宙人の扮装をして学内を歩き注目の的となったり、友人の服を借りてメイクも仕草も似せてその人の日常を送ってみたり（特異な扮装をするより「意外と難しく、発見が多いかも」と齋藤教授）。「若いうちに女性的な格好をしてみたかった」とロリータ風ファッションに挑戦した男子学生もいた。ドローイング、写真、散文と絵の日記のようなコラージュなどなど。人の数だけ発想と発見があることがよくわかる。

学生にかける言葉は「どの方向性でいくか、当日、直前まで悩んでいる」と齋藤教授。講評はライブなのだ。

何にでもなれる、どこへでも行ける

仕上げられた作品もまたユニーク。道路傍の標識の視点から見た人間の姿を写し取った作品。伝説の座敷童に自身の内面を重ねた、憑依的な自画像。人間に食べられるという点で「圧倒的弱者である」パンの視点から人間社会を眺めたドローイングには、へえー、と齋藤教授も見入る。

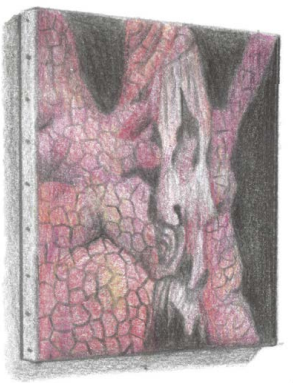


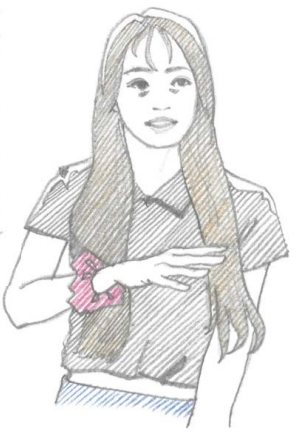
ロリータ服を着る際、周りの女子からのアドバイスは「自分がいちばんかわいいと思うこと」だったとか。

「生き物でないものに感情移入するのは、そのものに命を吹き込むこと。全体的に、見捨てられたもの、弱い立場の存在への優しい視点が多いね」

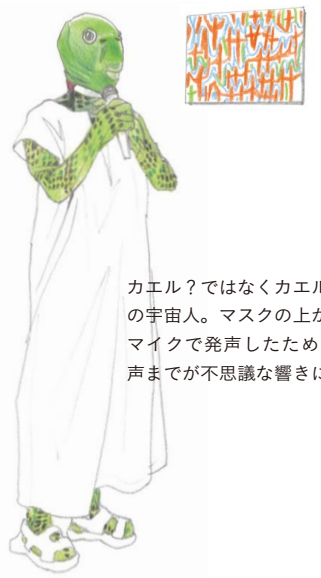
ある土地や出来事や歴史にフォーカスした作品では、「その場所で、戦争などで人がたくさん亡くなっていることにあらためて気づいた人も多いはず」と教授。作品をつくるためには、今自分が体験していることだけではなく、目に映るもののその奥に想像を働かせることも大事だと指摘する。

そうした視点の力を強く感じさせる作品があった。2年生の百武弓月さんの油絵は、朽ちた木の幹をモチーフに描かれたもの。背景に浮かび上が





百武さん。普段からいじめを受ける子どもたちなど、声を出せずにいる存在に関心を寄せ制作をしている。



カエル？ではなくカエル風の宇宙人。マスクの上からマイクで発声したためか、声までが不思議な響きに。

る鱗状の模様には、無数の顔が描き込まれている。

「谷中のお寺で、大木のクスノキの空洞にあるときハチが巣をつくって、危ないからとセメントを流して埋めたという話を聞いたんです。ハチはしばらく生きていて、その羽音がずっと響いていたと……。もしかしたら、ハチたちの魂がそこから抜け出そうとしたんじゃないのかなって」

表情のない顔、声のない声。作品からは、今、この瞬間も戦闘が続く紛争の国々にいる人々の叫びが響いてくるようで、胸を突かれる。そして、遠い国の人にも、この世にはないものにも何にでもなれる、絵画の、芸術の自由。

すべての作品の講評を終えた齋藤教授は「作品はまだ未熟でも、皆の語る言葉はすごく率直。自分の人生の引き受け方については私たちの世代より確固たるものがあるんじゃないかと感じました。すごく光ってて、うらやましい。だから、自分が思ったこと、考えたことについては自信をもって、大事にして」と語りかけた。それこそが、この課題に込めた齋藤教授のメッセージなのだろう。

「絵のうまさは、あるところまでいったら頭打ちで、あとは似たようなものになっていくだけ。完成度で競っても作家としてやっていけるわけではないことは、今、私たち自身が経験していることだったりします。学生たちが画家になるのか、もっと広義でのアーティストになるのか、いずれにしても相当いろんなものを見て、いろんな考え方からテーマを拾っていかないと、この先の道は開けないので……。それにしても、課題は答えを出させるためだけのものではなく、こちらが学ばせてもらうものでもあるんだなと、あらためて思いましたね」

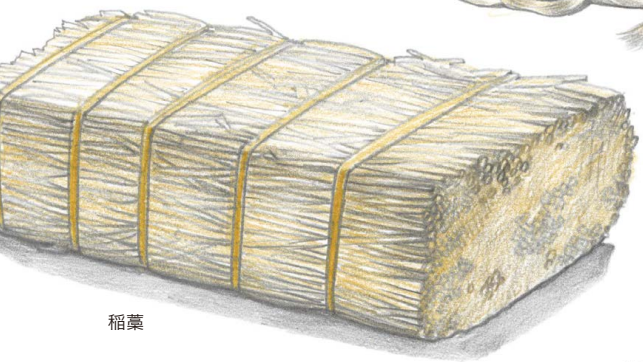
これもまた視点の交換。授業は、誰にとっても発見の宝庫だ。

PART 3 選択カリキュラムNo.7「キャンバス実験工房」
描くって、簡単なことじゃない。自分の絵を「置く」場所を求めて

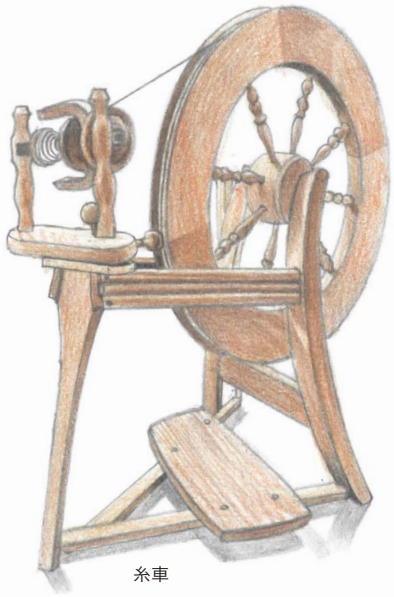
手紡ぎは最高の瞑想タイム

さて、最後は、絵を描くベースとなるキャンバス自体をあらためて捉え直そうという、これまた意欲的な授業だ。髙畠依子（たかばたけ）准教授担当の選択カリキュラムNo.7では、絵を描くためのキャンバ

スライバー



稲藁



糸車

スピンドル

糸づくりは髙畠先生が、藁編みは修士２年の劉侗翰（ラウ・トンハン）さんが指導。別の教室にいた学生までがいつのまにか輪に。

スを自らの手でつくるという実践型の授業。しかも、なんと糸から紡いで織るというのです。

教室の様相もいつもと一変。童話に出てきそうな足踏み式の糸車（糸紡ぎ機）が登場したかと思うと、続いて全面にブルーシートが敷かれ、抱えられないほどの大きなブロック状の稲藁が！

「材料はリネン（亜麻）と藁。リネンはスライバー（植物から梳きとった繊維の束）の繊維を撚り合わせて糸からつくります。藁は撚り合わせたり編んだりして紐にして。まずは、体で覚えよう」

匂いをかいでみて、と髙畠先生。香ばしくて酸っぱみのある香りを持つスライバーから細い繊維を引き抜き、水をつけて指先で撚り合わせ、スピンドルという糸巻きにくくりつけていく。藁は、陽に灼けた干し草の匂い。若い学生さんたちもま

ずまず歳を重ねた私も、藁編みは初体験です。

えーと、3本ずつ両手にとって指に絡ませて、手のひらを擦り合わせるようにズリッと……手がギシギシになるけれど、夢中になっている間に、うん、なんとなく形になってきた！　周囲を見ると、さすが美大生たち、どんどん糸や縄のかさが増していく。最初は静まり返っていたのが、コツをつかんでいくにしたがって周囲とおしゃべりもできるようになり、教室というよりは村の寄り合いのような雰囲気に。「楽しい」「ずっとやっていられる」「藝大に入ってよかった！」（↑そこ？）といった声が、あちこちで楽しげに上がる。

「糸を撚ってると、無になるよね。ガンジーはそれを瞑想って言ってたけど、本当にそう。私たちが普段使ってるキャンバスって、白いじゃない？でも、糸はもともと白じゃないし、キャンバスも必ずしもそうでなくてもいいことがわかるよね。自分なりのキャンバスをつくってみて。何か身につけたり、使ったりするものでもいいよ」

髙畠准教授。「授業が終わってアトリエに戻っても、気がつくと糸を撚っていたりする」ほど“瞑想”の虜。

髙畠先生自身も、糸を撚り、テキスタイルを織り上げるように作品づくりを行ってきたアーティスト。作業をしながら絵のことを常に考える、このプロセスを体験することが、授業の狙いだ。

「ファッションデザイナーは、どんな服をつくるかの前に、糸を選んだり布を織ったりするところから始めますよね。あるいは、この布だからこういうデザインにしようかと……絵描きにも、そんなことができると思うんです。イメージや色の問題のほうが重要視されがちだけど、絵をのせる土台からからつくっていくと、その行為自体からもインスピレーションをもらえるので」

最初に編んだ縄を草履にした学生が複数。履き心地を尋ねられて「信じられないくらい悪かった」と苦笑。

手を動かす、その遠くにいつも絵が

最初の授業からおよそ3週間後。学生の皆さんが大変な苦労をされたであろう時間を軽々ショートカットしてしまう取材者のエゴをお許しください。それにしても、講評会で見た作品には、頭で

編んだキャンバスは形状も使い方もさまざま。絵を描いたり、大きく編んでデッキチェアの座面にしたり。

考えただけでなく、止まらない手から生み出された作品ならではの楽しさと興奮が詰まっていた。

糸から編んだキャンバスに絵の具を重ねたものがあれば、編み地自体が絵画になった作品もあり。高畠先生の提案を受けて、マフラーや帽子、バッグやラグなど、身につけたり生活のなかで使えたりする作品が多かったのも特徴的。こだわりの素材選びやモチーフ使いによる愛すべき一点ものは、その人にしかつくれないものばかりだ。

「想像だけで作品づくりをしていて、これまでやる気が出ないこともあったけど、手を動かしてみると最高に面白い！」「ぜんぜんやめられない、いつまででもやれる、体験したことのない集中力を感じた」「コンセプトからでなく、こんなふうに自然に、いつの間にかできていく絵もあるんだなと」「身につけるものをつくってみると、自分が地で作品が絵具のように感じられて」

時間の制約により未完成作も多かったようだが、つくることはそもそも楽しいこと。作品を語る言葉には、原点に立ち返った喜びがあふれていた。

「今回、きっといちばん遠くに絵を描くことがあったんじゃないかな。でも実は、ずっといちばん手前にあったのかもしれない。絵がそんなに簡単に形にならないことを、今回、皆は実感したはずです。でもこうして、どうにか形にした。自分の体から生まれる絵の可能性を、これからもずっと広げていってほしいなと思う」と高畠先生。ひとつの課題は、こうして次につながっていく。

今回、どの授業の教授陣からも言われたのが「最初の課題は、ずっと残る」ということ。入学して初期に取り組んだ課題、そこで体験したこと、おぼろげにでもつかんだ自分のテーマは、その学生のなかにいつまでもとどまり、卒業制作の頃まで、ひいてはアーティストとして活動し続ける限り、考え、向き合い続けていくものなのだとか。この日々を懐かしく思い出す頃、彼らはどんな未来を描いているだろうか？　期待しかない。

リネンの糸で編んだ傘。糸にはジェノベーゼソースで染めたものもあり、ほんのりおいしそうな香りが。

帽子とマフラーをそろいで制作。「編み地の色の表し方は絵具に共通する部分も。慣れたらもっといいものができる」と次作に意欲。

麻糸と藁を編んで三角柱に張った作品は、猫用の爪とぎ。面ごとに粗さを変えた細やかさに愛情がにじむ。

サメの歯や法螺貝などの自然のモチーフに糸や縄を巻きつけた、フォークロア色のあるインスタレーション（イラストはその一部）も。

お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

映画専攻設立20年 歴代の映画作品を一挙上映

大学院映像研究科映画専攻は、1～20期各期の代表作を一挙上映する『設立20年記念上映会』を10月13～27日に横浜・馬車道校舎で開催します。

国立大学初の映画教育機関である同専攻は、2005年4月に第1期生36名が入学して以来、数々の映画作品を生み続け、今年春には第20期生を新入生として迎えました。この節目となる年に、これまでに一般公開された修了制作作品に加え、実習などで制作された未公開作品から各期の代表作を上映するほか、1～20期の全作品目録を刊行し、この20年を振り返るとともに未来への展望を探る機会にしたいと考えています。この貴重な機会に、皆さまのお越しをお待ちしています。詳細は上映会ウェブサイトをご覧ください。

https://anniversary.geidai-film.jp/

映画専攻の制作風景

「藝大アートプラザ・アートアワード」 受賞アーティストたちの新作が一堂に

上野キャンパス内にある、藝大アーティストの作品を展示販売するギャラリー「藝大アートプラザ」では、10月20日まで『藝大アートプラザ・アートアワード受賞者招待展～藝大の星～』を開催しています。

藝大アートプラザでは年に1度、藝大生を対象としたコンペ「藝大アートプラザ・アートアワード」（旧「藝大アートプラザ大賞」）を実施しており、今回はこれまでに受賞したアーティストたちの新作が並びます。入場は無料。詳細は公式ウェブサイトをご覧ください。

https://artplaza.geidai.ac.jp/

右記の展覧会より

柳宗悦の朝鮮研究、音楽と建築をつなぐこころみ 藝大出版会の新刊

藝大出版会では新刊2点を刊行しました。

『柳宗悦の心と眼―日本民藝館所蔵朝鮮関連資料をめぐって』（片山まび、杉山享司、古屋真弓、芹生春菜、田代裕一朗編著、6600円）は、民藝運動の創始者として知られる柳宗悦の朝鮮に関する研究をまとめた一冊。日本民藝館所蔵の柳宗悦に関する朝鮮関連資料と、その研究成果について収録しました。

『建築が夢見る音楽　Architecture dreams Music (AdM) ～音楽と建築をつなぐこころみ～』（古川聖、藤井晴行、濵野峻行著、2750円）は、長年にわたり著者らが共同で行ってきた、音楽と建築に関する研究であり、実践であり、アートでもあるようなAdMの内容と、そこで生まれた作品や研究成果、そこで得た知見を紹介しています。

藝大出版会の書籍は、藝大アートプラザでも販売中。最新情報は公式X（@GeidaiPress）をご覧ください。

大学美術館（上野）の展覧会

本館

特別展『黄土水とその時代
―台湾初の洋風彫刻家と20世紀初頭の東京美術学校』
9月6日～10月20日

佐藤時啓退任記念展
with 研究室生＋卒修生
―交差する時間―Intersecting Time
11月2～17日

木津文哉退任記念展 錯視の表情
11月16日～12月1日

芸術未来研究場展
11月27日～12月3日

東京藝術大学大学院美術研究科
博士審査展2024
12月13～23日
※陳列館・正木記念館でも開催
（陳列館・正木記念館での会期：12月11～21日）

第73回東京藝術大学卒業・修了作品展
2025年1月28日～2月1日
※陳列館・正木記念館でも開催

特別展『相国寺承天閣美術館開館40周年記念 相国寺展―金閣・銀閣 鳳凰がみつめた美の歴史』
3月29日～5月25日

大学美術館　本館

陳列館

「水色科研」展覧会＋公開研究会
9月20～24日

藤原信幸退任記念展
～ガラス造形20年の軌跡～
10月8～20日

退任記念 斉藤典彦展―水の國／白き森―
10月26日～11月10日
※正木記念館でも開催

清水泰博退任記念展
11月16日～12月1日

第9回アートプロジェクト展
2025年1月7～17日

GAアートプロデュース領域演習展（仮）
3月21日～4月6日

陳列館

奏楽堂（上野）の演奏会

藝大オペラ定期 第70回
10月5・6日　各14時
S席 6000円
バルコニー席 5000円

藝大定期 第424回
10月11日　19時
4000円

ピアノシリーズ2024
音楽の至宝 vol.10
『2台ピアノで綴る名曲の午後』
10月12日　15時
一般 3000円
学生 1000円

藝大プロジェクト2024
『西洋音楽が見た日本』第1回
10月20日　15時
一般 3000円
学生 1000円

上野の森オルガンシリーズ2024
『親愛なるフォーレ 没後100年に寄せて』
10月26日　15時
一般 3000円
学生 1000円

うたシリーズ2024『愛をうたう』
11月3日　15時
一般 3000円
学生 1000円

藝大定期 第425回 合唱定期演奏会
『スターバト・マーテル』
11月8日　19時

4000円

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校 創立70周年記念演奏会(藝高生徒の部)
11月9日　14時
1500円

モーニング・コンサート 第11回
11月14日　11時
1500円

ウィンドオケ定期 第98回
11月16日　14時
一般　3000円
学生　1000円

邦楽定期 第90回
11月20日　17時
3000円

シンフォニーオケ定期 第70回(藝大定期 第426回)
11月21日　19時
一般　2500円
高校生以下　500円

藝大プロジェクト2024『日本が見た西洋音楽』第2回
11月23日　15時
一般　3000円
学生　1000円

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校 創立70周年記念ポップスコンサート(仮)
12月1日　14時
9000円

第41回 台東第九公演 下町で第九
12月8日　15時
料金未定

藝大室内楽定期 第51回
2025年2月1・2日　各14時
2500円

チェンバーオケ定期 第44回
2月16日　15時
2500円

モーニング・コンサート 第12回
2月20日　11時
1500円

モーニング・コンサート 第13回
3月13日　11時
1500円

安良岡章夫 退任記念演奏会
3月20日　15時
無料
申込方法未定

福島明也 退任記念演奏会
3月22日　時間未定
無料
申込方法未定

平松英子 退任記念演奏会
3月23日　時間未定
無料
申込方法未定

第18回 奏楽堂企画学内公募演奏会
3月27日　時間未定
詳細未定

東京藝大ジュニア・アカデミー成果披露演奏会
3月30日
第1部　11時20分開演予定
第2部　14時10分開演予定
2000円

奏楽堂

＊一部の公演を除き、全席指定
＊展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト(https://www.geidai.ac.jp/)をご覧ください。

＊展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学大学美術館
☎050-5541-8600
(ハローダイヤル)

＊演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学演奏藝術センター
☎050-5525-2300

＊演奏会チケットの取り扱い
ヴォートル・チケットセンター
☎03-5355-1280
チケットぴあ
https://t.pia.jp/
東京文化会館チケットサービス
☎03-5685-0650
イープラス
https://eplus.jp/
東京芸術大学生活協同組合(店頭販売のみ)
☎03-3828-5669

○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜り、深謝申し上げます。本号では、2024年2月から7月までに寄附をいただいた皆様のご芳名を掲載させていただきます（掲載をご承諾された方のみ）。

［個人の皆様］

高橋直樹様　500万円
高橋佳子様　500万円
齊藤斗志二様　100万円
戸谷克昌様　100万円
内海利次様　30万円
新角卓也様　30万円
十倉真理様　30万円
植木桂様　10万円
田中秀幸様　10万円
中林忠良様　10万円
山根一毅様　10万円
小川洋司様　5万円
小池高之様　5万円
新谷眞理子様　5万円
秋葉弘実様　4万円
柴本美蘭様　3万円
菊川政弥様　2万円
原田一正様　2万円
李匡鎬様　1万円
磯貝紀枝様　1万円
櫟本和徳様　1万円
伊藤常修様　1万円
井橋光平様　1万円
今井菜々美様　1万円
色本善信様　1万円
上田武夫様　1万円
上原昇様　1万円
氏原孝貴様　1万円
氏原瑞代様　1万円
奥浦博子様　1万円
小畑善昭様　1万円
金森恵美様　1万円
久木田知代子様　1万円
後上友美様　1万円
小山晶子様　1万円
嶋田高宏様　1万円
杉浦俊太郎様　1万円
鈴木敦子様　1万円
鈴木眞知子様　1万円
谷口浩一様　1万円
玉置雄三様　1万円
戸松令子様　1万円
永友満子様　1万円
中山昌樹様　1万円
福田典子様　1万円
藤本昌志様　1万円
細谷和夫様　1万円
宮杜美智代様　1万円
門田伸一様　1万円
山本武史様　1万円
吉田正様　1万円
秋山境様　5000円
石原薫様　5000円
梅谷進様　5000円
須藤豊晴様　5000円
瀬戸勇様　5000円
永井隆夫様　5000円
松山実様　5000円
有山真弓様　3000円
河野里香様　2000円
島野聖章様　2000円
畑勝法様　2000円
米村あずさ様　2000円
牛田尚様　1000円
及部保雄様　1000円
栗山正太郎様　1000円
藤代國忠様　1000円
青山夏実様
赤尾由美様
井上貴文様
井上正英様
今井梨乃様
上田良一様
上田平重樹様
宇佐美敏男様
内田薫様
内田良一様
大川聡様
北川翔一様
木村佐千子様
小橋哲郎様
小林裕之様
坂口悰治朗様
隅修三様
鷹輝政様
髙木雄太様
髙橋和美様
滝沢健作様
武田充弘様
趙誠峰様
土嶺由美子様
長浦武史様
中林祥樹様
成田博志様
野尻悠太様
原田清朗様
廣瀬俊廣様
福島武様
峯佳代子様
宮島惠一様
三好克美様
村瀬聖文様
森下祐子様

［法人などの皆様］

山田産業株式会社様　100万円
株式会社坂入産業様　30万円
株式会社日本ウィルテックソリューション様　20万4850円
一般社団法人現代舞踊協会様　3万4800円
DOOR 7期生様　3万円
東日本旅客鉄道株式会社様

○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実施と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いします。

お問い合わせ
社会連携課渉外企画係　☎050-5525-2400
藝大基金ウェブサイト https://fund.geidai.ac.jp/

編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714　東京都台東区上野公園12-8
東京藝術大学内　『藝える』編集部
Fax：03-5685-7760
E-mail：contact@ml.geidai.ac.jp